

管理職になりたくない？

東京都内の公立学校では、副校長などの管理職のなり手不足が深刻のようです（10月25日付朝日新聞）。

団塊世代が大量退職し欠員が増えたとか、副校長への有資格者が減ったことなどが背景としてあるようですが、都教委では、それ以上に、副校長の多忙さが敬遠されているのではないかと考えているようです。

報道によると、副校長は朝7時に出勤して夜は11時に帰るという勤務実態にあり、「副校長はセブンイレブン」といわれているそうです。副校長の仕事は、パソコンが壊れた、窓硝子が割れたといったことから、都教委からの調査への報告、更にはPTAへの対応など実に様々であり、日々忙しさに忙殺されているというのが現状のようです。

これは東京の話として紹介されていますが、

どこかで聞いたような話だとは思いませんか。何のことはない、北海道においても、副校長や教頭先生は同じような状況に置かれているとあって良いでしょう。そして、道内でも、既に教頭のなり手が少なくなっているのです。

師範塾の仲間にも教頭先生がいますが、彼らの働きぶりを見ていると、スーパーマン的です。組合対応から学校の管理、学校行事や地域の行事への対応、道教委や市町村教委からの調査への対応などなど……。

私も教育長をしていましたから責任を感じていますが、そんなに頑張っただけで身体は大丈夫かと心配になります。若い教員が教頭の状況を見たら、教頭になろうという気持ちも萎えてしまうのではと、心配になります。

それでも、昔は、少し我慢すれば校長になれるという状況でした。しかし今は、学校自体が減ってきていますので、教頭になれたからといって校長になれるとは限らない、教頭のまま終わるというケースも生じます。

激務の割には恵まれない。こうした状況のままでは、有為の人材は得られません。少しでも、教頭の負担、あるいは負担感の軽減に努めるべきです。

学校で良くいわれることは調査ものが多いということですので、行政側として、調査の精選を更に行っていただきたいと思います。

また、学校は「鍋蓋」の組織といわれますが、蓋のつまみは校長だけではありません。

校長にとって教頭は部下であると同時に、「鍋蓋」のつまみを構成する管理職でもあるのですから、校長は教頭と一体となって学校運営に努めるべきです。

教頭は、何でも屋、便利屋ではないはずで、「自分も教頭時代苦労したから、今の教頭もこの位は」と思っている校長がいるかも知れませんが、昔と今とは、学校をめぐる環境が大きく変わってきていることを認識すべきでしょう。

一般教員の意識も変える必要がありそうです。面倒なことは教頭に押しつけておけば良いという発想は、貧困です。自分が同じ学校の構成員であることを忘れてしまっているのでしょうか。それとも、教頭は敵だと思っているのでしょうか。

最後にいいたいのは、教頭も存在感を出して欲しいということです。上にも下にも遠慮しているだけでは、立つ瀬がないではありませんか。校長が変われば学校が変わるといわれますが、同じように、教頭が元気でなければ、学校も元気が出ないと思います。だから、私はあえていいます。

ガンバレ教頭先生！！（塾頭 吉田 洋一）